思慕の還り

U. N. O.

薄暗かった教室へ、次第に朝日が降り注いできた。始業よりも随分早く、生徒が一人ぽつりと入ってきたかと思うと、鞄を置いてすぐに出て行ってしまう。また別の一人が登校すると、机に向かって勉強し始めた。ぽつり、ぽつりと生徒たちが増え始め、静寂だった校舎の中は次第に賑やかな声に充たされていった。

この日何度目かは分からないが、再び扉は一人を教室へ招いた。室内を進む彼はクラスメイトと挨拶を交わして、自分の机へまっすぐ向かった。

「お。北川！　おはよー」

「はよ」

北川は自分へと振り返った少年に軽く手を振って応えた。体の動きに合わせて、赤銅がかった髪が緩く揺れる。北川は、朝も早くから雑然としている友人の机を、腰を折って覗き込んだ。

「なに、数学の課題？」

「今日は一限からじゃん。なぁ終わらないしノート見せて」

「やだ。栗橋に見せると、解き方から全部見ていちいち文句言うし」

北川が栗橋に背を向けて前の席に腰を下ろすと、後ろからブーイングが聞こえてくる。早くやっちまえよ、と北川が体を捻ってノートを指差した。

「頼むよ！　別にオレ何も言わねーからさぁ」

「ファイトー、授業始まっちまうぞ」

「ケチ！」

「誰がケチだ！」

ムキになって声を上げた北川に、栗橋はにやりと口角を上げた。

「じゃあ見せて！」

「やだ！」

不毛な争いを続ける二人に、もう一人少年が寄ってくる。おはよ、と彼は北川の左隣、栗橋の斜め前に座った。二人が返事した後、栗橋は辛うじてずっと持ち続けていたペンを、とうとう放り投げた。

「青山！　数学の課題見せてくれ！」

朝の開口一番に言われた言葉に、青山はきょとんと眼を開いた。持ってきた鞄を机の脇に掛け、自分の椅子に寄りかかるようにして北川と栗橋に体を向けた。

「いいけど。栗橋のもうほとんど終わりかけじゃん？」

手を合わせる栗橋に、青山は鞄に手を入れてノートを渡した。礼を告げ、真剣に課題を写し始めた栗橋へ北川は面白くなさそうに目を遣るが、気を取り直して青山に話を振った。

「そういや昨日ＵＧやったんだっけ？　どうだった？」

「お！　それがすげぇ急展開なんだよ」

興奮した様子で青山は昨夜に放映されたドラマについて語った。

「何か今までの流れが一気に変わっちまったんだ」
「あ、結局先週のあの子供は何だったんだ？」
少年二人は宿題に苦しむ友人の傍ら盛り上がっていた。
「かっこいい作品だよ。オレ原作本買おうかな」
「じゃ帰りに本屋寄ってくか」
そう北川が提案した時、携帯電話のバイブ音が鳴った。朝の、まだうるさい教室の中でその音の元は聞き取りづらく、少年たちは一瞬思案顔になった。
「北川のじゃない？」
青山に脇の鞄を指差され、彼は自分の電話を手にとった。カチカチと、小さな狭い範囲の中を親指が動き回る。北川は目を伏せ気味にし、ぱちんと電話を閉じてまた鞄へ放った。
「わり、オレ今日すぐ帰るわ」
「何かあった？」
今までの会話を覆す発言に、青山は聞き返した。
「親父に仕事頼まれた」
苦笑を浮かべる北川に、そっか、と青山が肩を竦める。
「そういえばたまに手伝ってるんだっけ」
「なあ、北川の親父って店か何かやってんの？」
栗橋が写し終えたノートを青山に返して、話に加わった。
「自営業、だなぁ。オレも将来親父と同じ仕事するつもりだし、やっぱ忙しいみたいだから少し手伝っているんだ」
北川の言葉に二人は感心してため息をついた。
「偉いな。もう進路決めているんだ」
「オレなんかやっと受験終わったから遊んでばっかだよ」
何も慌てなくたっていいだろ、と北川が呟くと同時にチャイムが鳴った。生徒たちが急いで席に戻った所で、担任教師が現れる。女生徒の号令の後、朝のホームルームがゆったりと始まった。

＊　＊　＊

学校を終え、北川は家の鍵を開けた。部屋中に西日が差し込んでいるが、まだ空は明るい。これから夏至に向けて、どんどん日は延びていくだろう。人気のない家の中、彼は浴室で頭髪を洗い、汗を流すと、グラスの水を飲み干して一息ついた。湿った髪が乱暴に掻き回され、少年のブロンズが西日に輝いた。
彼がリビングにある棚の扉を開けると、漆黒の薄いケースが置かれていた。中には印字された白い紙と、黒い大判の封筒。椅子に腰をかけ、ケースに封筒を戻すと、彼は自分に宛てられた指令書を一字一句丁寧に辿っていった。太陽は本格的に沈み始め、部屋を照らす場所がますます東側に移り、次第に空気は黒に染まる。何度も二つの眼球が左右を往復した後、北川は紙を裁断すると、家のカーテンを締め切り、身支度を整えスーツに身を包み、ケースと自分の鞄を手に出て行った。
いつも通い馴れた道も、時間を変えると裏の顔を表す。賑やかな本道も、一本細道に入ると別世界へ辿り着く。電車から降りて横道に入った場所、北川は入り組む街の夜へと進んで行っ

た。暗い道の明るい電灯の下、周囲の闇と同色のスーツが踊った。少年が足を止めた先は、クラシカルな一件の喫茶店だった。いや、時間帯に合わせ、これからは夜のバーへ変わる。軽やかな鈴の音が来客を知らせると、店の主人が一瞬だけ北川に目を向け、いらっしゃいませ、と水の準備を始めた。

辺りを見渡すと、一人テーブルにつく客が視線をあわせて手を挙げた。北川と同じ黒いケースを持っている。

「初めまして」

北川はまっすぐその女の元へ向かった。

「関東明条組・北川壮介代理の、北川勇人です」

女は優美に拝礼した。

「こちらこそお初にお目にかかります。山崎建設株式会社社長・山崎竜彦の代理で参りました、有須由乃です。よろしくお願いしますね」

有須は北川よりは年上だが、十分瑞々しい、華やいだ若さを感じさせる微笑を浮かべた。二人が同じテーブルに付くと、主人が北川の分のグラスを置いた。適当な料理を選び終え、有州はゆっくりとアイシャドウで縁取られた目を細めた。

「こんなにお若い方だとは思いませんでしたわ。もう明条組様に入られていますの？」

「いや」

北川はレモンが香るグラスを傾ける。

「将来は正式に入会するつもりですよ。ですがしばらくは、父の仕事を少し肩代わりするだけでいるつもりです」

壮介様ね、と北川の父の名を口にした彼女に、彼は肯定した。

「それまでは一応、カタギでやっていきます」

彼は視線を落としていた。

「カタギの生活をしながら、ですか。難しいですね。煩わしいことも多いでしょうに」

「確かに大変ですけれど、思い出にしますよ。表とのはっきりした繋がりを持てるのは、恐らく今の時間だけでしょうから……」

「出口のない、裏の世界ですからね」

誇らしく嬉しそうに告げる有須の言葉と共に、彼女のグラスの氷が溶けて音を立てた。

「もちろん今更、表の世界で生きる気はありません。オレが異端なのはわかりますから」

彼は窓ガラスに映る自分の頭髪を見た。今彼がいる場所では、北川の髪色は周りに馴染んでいる。むしろ黒髪は少なく、いたとしても一般的でない髪形の人間ばかりだ。彼が今座る場所は、昼間に過ごしていた学校とは全く違った雰囲気を持っていた。

「この髪色も、天然なんですけれどね、なかなか表では手厳しい」

自身の髪を摘む北川に、有須は驚嘆の声を洩らした。

「最近は茶髪の方が多いですから、染められているのだと思っていましたわ」

「それでよく教師から注意を受けますよ」

勿体ない、と彼女は残念そうな表情を浮かべる。

「勇人様の色は、他とは少し趣が違っていて、とても魅力的ですのに」

北川が有須の言葉に首を振っていると、厨房から色とりどりの料理が運ばれ始めた。仕事の話は食後にでもと北川が提案し、彼女は同意した。二人が口に運んでいる料理は、格式ある正統な様式ではないにせよ、豪華な食事だ。しばらくナイフを動かした後、北川が口を開いた。

「この世界に随分と執着心があるようですね」

有須は一瞬だけ食事の手を止めた。

「ええ。私が生きる場所ですもの。他は考えられませんから」

「詳しく聞かせてもらっても？」

少年の申し出を受けて、女は長く、ゆっくりと呼吸する。

「……そうですね。私も立ち入ったことをお聞きしてしまいましたし」

ですが、と彼女は言葉を続けた。

「私がこちらにいる理由など、お聞かせできるほど大したものではありません。強いて申し上げますならば……他に生きる術がなかったからでしょうか」

ずっと同じような笑顔を作っていた女は、ふと悲しく、そして懐かしげな空気を醸成した。

「誰もが、初めから裏にいた訳ではありませんよね。最終的には、それを選択したのですけれど」

「……そうですよね」

ナイフを置き、皿の上のものが全てなくなるとタイミングよく片付けられていった。続いて追加されるグラスと飲み物。互いにグラスを満たし、テーブルに場所を作ると、北川は持ってきたケースをテーブルに乗せた。

「本題に入りましょうか」

「ええ」

北川はケースから、幾枚もの上納金一覧を出した。女もケースを開け、小切手を切る。若い二人だけに任されたような仕事だ。上層部にとっては、彼らが取引の場に慣れて、裏の人間としての経験を積めば、目的は達成された。ほぼ決定事項の、書類の取引を交わすだけの仕事は、少しの話し合いだけで滑らかに運んだ。やや遠くに座る他の客や店の主人は、全くこの席に関与せず、始まったばかりの小夜を過ごしていた。

やがて二人はケースを閉じ、店を後にした。北川が出掛けた時より、更に夜は濃くなっていた。狭い道を首尾よく進んで前後に揺れる彼の腕に、女はするりと絡まった。

「お仕事も終わったことですし。今からどこか入りません？」

「冗談でしょう。明日は早いので失礼しますよ」

つれない方ね、と呟くが、女はそのまま北川と並んで歩いた。その顔には喜色が浮かんでいた。北川も、取引相手と向かう道を違えるまでと、彼女を振り払わずにそのままでいた。賑わいを見せずに、静寂を保つ裏道。響くのは北川の革靴と女のヒールが鳴らす足音だけだった。安っぽい電球が灰色のコンクリートを黄色く染める。

人一人が、目の前を走り抜けた。

すぐ傍で火の粉が横切った。続けて複数の人間が駆ける音。男の低い叫び声が辺りにくぐもった。二人には聞き覚えのある、火薬の破裂する轟音。静寂な裏道は一瞬の内に嵐に包まれた。

「伏せろ!」

脳髄に響く鋭い音の後、女の商売道具でもある顔に赤い線が浮き出た。線は次第に盛り上がり、血の滴が頬を伝う。

組同士の争いだった。

「……っ面倒に巻き込まれたな」

北川は舌打ちすると、女を連れて元来た道にきびすを返した。

「どうして抗争なんかが!?」

走ってしばらく経った後、二人は路地裏に身を潜めた。女が顔を手の甲で擦っても、滴は一時消えるが、頬の上で掠れて赤がなかなか消えなかった。

「抗争が減ったって言ってもな、オレらが消えた訳じゃねえんだよ」

北川は壁から顔を出して周りを伺いながら女に返答する。

「……企業舎弟の愛人なら、少しは聞いているだろ」

最後に付け加えられた言葉に、女はその場で俯いた。ルージュの唇が、噛み締められて頬と同じ色に変わっていた。

抗争の最前線など二人とも経験がない。今は生き延びて、互いのテリトリーに帰り報告することが先決だった。月夜の下、騒ぎはますます大きくなっていく。人影を感じて、彼らは再び走り出した。入り組む路地を潜り抜ける。突き当たりに出た所で、一人の男が悲鳴を上げて倒れ込んできた。足の小さな穴からは血しぶきが上がっていた。とっさに北川は女の腕を掴み取ってその場を逃げ出す。女の目の端に、拳銃を構えた男の姿が映った。

「待て! ガキじゃねぇか、関係ねぇ奴は撃つな!」

「ははは!! こんな場所にカタギはいねぇだろ!」

立て続けの銃声と共に、北川の二の腕に熱が走る。ようやく体勢を整えた時、彼の横目に深紅が舞った。

「走って…ッ…!」

男たちは他に重要な獲物を見つけて、二人を追わなかった。汚れた横道に入ると、女は北川の手から滑り落ちた。彼女の腹部の中心には、どろりとした血溜まりが広がっていった。

「クソ!」

彼女を抱えようとするが、腕の痛みが腰にまで響いて動けなかった。女の上半身を起こしただけの体勢で、北川は口汚く悪態をついた。女は自分の脇腹に右手を、北川の腕に左手を添えた。震えた両腕は、片方は女自身の、もう一方は北川の血がこびり付き、乾燥して固まった。

「いいから……逃げて」

潤んだ両眼から伝い落ちる涙に、北川の目はそらせなかった。

「病院行けば助かるだろ!? ムダなこと考えんな!」

必死に腕を突っ張る北川の顔に苦悶が浮かぶ。その様を女が愛おしげに見つめると、また滴が零れた。

「義理とか……人情とかは、いいから……」

北川は息を詰める。彼女の出血と共に、北川の力が抜けてい

った。女の後頭部の髪に触れたまま、北川の手の甲が冷たい路地に付いた。
「今まで生きてきて、ロクな死に方しないと思ってた……」
北川の腕に、更に重みが加わった。
「誰かの腕の中で死ねるなら、本望よ」
白い腕が、血溜まりにずり落ちて濡れた。
北川は放心のまま有須の傍らにいた。北川のスーツが彼女の血を吸っていく。しかし、吸収量は出血量に追いつかない。彼の目を覚まさせたのは、今晩に何度も聞いた抗争が近づく気配だった。彼は一瞬だけ体を見下ろした。
素早く立ち上がり、有須を背に寄りかからせて両腕を肩に掛けると、脇に二人分の荷物を挟み、北川は有須を背負って歩み始めた。有須の血が服を越えて肌まで滲んできた。腕も、腹部も足もスーツが変色している。彼の頭に、闇に浮かぶ裏路地の赤い痕の映像が離れなかった。赤銅が、夜の町に鈍く閃いた。

＊　＊　＊

新聞には第二面の隅に記事が載っていた。テレビではニュースがまとめて少し放映された。元々一般人が来る場所・時間帯でなかった上に、関係者の殆どが逮捕されたからだ、ごく小規模の報道だった。
近場で起こった事件といえども、電車で小一時間かかる場所の話では皆緊張感などなく、北川の住む町の人々は今日も続いたさわやかな一日を過ごした。青山と栗橋が下校しながら道草を食う計画を立てている間に、北川は昨夜をまざまざと思い返していた。場を少し離れた後、父親に電話すると、彼の舎弟が車を出してくれた。有須はあの後闇医者に回されたが、今となっては、回復しているかも霊安室へ行ったのかもわからない。後々に伝い聞く可能性もあるが、表の世界に身を置く現在の北川では知ることはない。有須がどちらになったにしろ、撃った相手の組は、関東明条組の関係者を攻撃したのだから、それ相応の落とし前をつけられるだろう。
組に帰った北川は、夜に起こった出来事を事細かに報告した。持ち帰ったケースを父に渡し、腕に処置を施して、スーツを処分した所でやっと北川は家へ戻った。身支度を終えると、彼は事切れたように眠った。夢見は悪かったものの、日が昇ってからまた始まる学校生活を乗り越えるには十分な休息がとれた。
「北川」
友人に呼び掛けられ彼は思考の海から戻ってきた。前を並んで歩いていた二人は、揃ってやや顔を背後に向けていた。
「大丈夫？　手伝いも程ほどにしなよ。ね？」
幼いいたずらっ子のような口調の青山に、それもそうだな、と北川は曖昧に返した。
「週末は手伝い暇か？　オレん家で、泊まり掛けで遊ぼー」
明日は着替え持参で登校な、と栗橋は北川の肩を叩いた。青山が以前やった野球ゲームをやりたいと提案し、今晩引っ張り出しておくと栗橋が応える。二人は昨夜の事件について気にも

留めていない。朝すぐに学校へ行ってしまう学生なら、事件について見聞きもしていないだろう。
「じゃ、明日はオールでゲームやり放題だ」
フッ、と北川の肩の力が抜けた。
「そん時は、少しは涼しいといいな」
青山が初夏の日差しにうんざりしていると、栗橋が前方を指差した。
「そこのコンビニ入ってアイス食おう」
足早に冷涼を求めて二人は歩いていくが、途中すぐに体を反転した。
「北川、早く行くぞ！　今日は暑すぎる！」
栗橋が手招きする。昨日とは違う、少し西寄りの太陽が、友人二人を照らしていた。北川は笑みを浮かべ返答すると、友人の後をすぐに追った。